月の文字

吉岡幸一

真夜中に降る雨の音を聴きながら
読みかけの本を開いて読んでいると
紙に印字された文字が立ち上がり
宙に浮かんで躍りだす
一文字一文字が書斎の空間にひろがっていく

文字と文字は繋がり合っては意味を生み
離れ合っては意味を失い
意味の無い文字と文字も重なりあって
新しい意味を生み出そうとして
狭い書斎のなかで動き回っている

深呼吸をすると
文字が私の口の中に入ってくる
息を吐くと飲み込んだ文字が出ていく
味も香りもしない文字だけど
雨のせいか蒸発しようとはしない

真夜中に降る雨の音に耳を傾けながら
何も書かれていない原稿用紙を眺めていると
宙に浮かんだまま困っている文字が
原稿用紙のマス目に落ちてくる
一文字一文字並んで意味を生んでいく

もしかして雨一粒は一文字なんだろうか
そんなことを思って外を見ると
硝子窓いっぱいに濡れた文字が貼りつき
流れ落ちて水たまりのように溜まっている
雨の音は文字の降る音でもある

窓を開けて顔を出すと
文字を浴びた顔は涙と一緒に濡れていく
思い切って外に出てみれば
急に雨が止んで月が現われる
月にはびっしりと文字が刻まれている

私は夜明けまで月の文字を読んでいる